

---

# MIDNIGHT・TV

† アラクネ †

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MIDNIGHT・TV

### 【Nコード】

N4278B

### 【作者名】

十アラクネ十

### 【あらすじ】

職と共に全ての栄光を失った、かつてのエリートサラリーマン。彼はある日ゴミ捨て場で拾ったテレビに、不気味な現象が起こるのを目撃する。怯えながらも、部屋から逃げ出すのを躊躇する彼。本当に恐ろしいのは、亡霊か、生きた人間か？

駅から大分離れた場所にある、古びたワンルームアパート。  
その狭い一室が今の俺の住居であり、許された唯一の居場所でもある。

テーブルとソファーと冷蔵庫とテレビ。ほとんどその四つだけで構成されているような、殺風景で寒々とした空間。それが、今の俺が維持していける、ギリギリの脆い縄張り。

深夜一時五十分。

俺はいつものようにソファーに沈んで、ぼんやりとテレビの画面に目をやっている。

ブラウン管の向こうでは、タレントが築地の高級寿司を口にして、大袈裟な仕草で舌鼓を打っている。

（築地か……。しばらく行ってないなあ）

ぼんやりとそう考えた後で、思わず自嘲気味に吹き出してしまった。

築地も何も、この町内を最後に出たのはどれくらい前だ？ここ暫く、部屋から出た記憶さえない。

俺は込み上げそうになる焦りと敗北感を殺し、ただ力無く唇を歪ませた。途端に胸に満ちる、冷たく渴いた深い諦め……。

ほんの半年ほど前まで、俺はある有名企業で働くサラリーマンだった。

仕事は大変だったが、自ら望んで入った職場だ。やり甲斐に満ち溢れていたし、忙しさに見合うだけの収入も充分に得ていた。

清潔で見栄えのいいマンションに住み、人目を引く車を運転し、洒落た店で優雅に酒を楽しむ。

当たり前すぎて、永遠に続くことを疑いもしなかった、そんな日

々。

だが、転落の穴など、いつどこに開いていても不思議は無かったのだ。

俺の場合は、春に移動になった新しい部署。そこにいた部長の存在。それこそがぼっかりと開いていた、暗い転落の穴だった。

妬みつぼく陰湿で執念深い、けれど権力を持ち恐れられる中年男。そんな人間に目の敵にされたことが、俺の運の尽き。

裏では部長の陰口ばかり叩いているくせに、部署の連中はあつという間に俺の敵に回った。部長に目を付けられないように。部長の機嫌を損ねないように。

嫌っていようと、蔑んでいようと、『長いものには巻かれとけ』……ってことだ。

子供の虐めばかりが取り沙汰される昨今だが、大人社会における虐めは、より根が深く残酷なのだ。俺は思い知らされた。

結果から言えば、理不尽な攻撃に憔悴しきった俺は、会社を自主退社する他なかった。

俺は負けたのだ。

負けて、全てを失った。

時計の針が、一時五十九分を指している。俺はじっとテレビ画面を注視したまま、体がひどく怠くなるのを感じていた。

綺麗に映っていたテレビ画面が乱れ、ザザ……ザ……というざらついたノイズの音が耳を擦る。

タレントの顔が歪んで途切れた後、しばし砂嵐が流れてパツと画面が切り替わった。

そしてテレビ画面に映し出されたのは、紛れもない、今俺のいるこの部屋。

（始まった……）

この奇妙な現象は、ゴミ捨て場からテレビを拾って帰ったその日から起こっていた。

傷だらけではあったが、決して古い型ではなかった、捨てられたテレビ。惨めな気持ちを殺して部屋に運ぶと、線を繋ぐだけで簡単に映った。

陰鬱な室内に音が響いたというだけでも、ずいぶん救われた気持ちになったものだ。

…しかし、その日の深夜二時ぴったり。見るともなくテレビを見ていた俺は、突然乱れた画面がいきなりこの室内を映し出すのを目の当たりにした。

驚いた俺は、部屋中をひっくり返して隠しカメラを探した。手の込んだ、ひどい悪戯だと思ったからだ。

しかし努力も虚しく、カメラの影すら見付けることは出来ず。

知人や警察に相談する気力も無いまま、謎の盗撮者に怯える日々は、一週間も続いただろうか？

ある日の深夜、俺はほんのふとした拍子に、テレビの中からじつとこちらを見詰める『それ』の視線に気付いた。

毎夜続く怪現象に人の手が入っていないと悟ったのは、その時だ。

『それ』は、長い髪を垂らした若い女だった。

あちこち破れ、赤黒い泥に汚れたワンピース。服が体にぴったり張り付いてしまっているのは、全身が滴るほどにずぶ濡れになっているからだ。

ニチャリ。

実際はテレビから音はしない。それは俺が想像した音。

ニチャリ…ニチャリ…。女はべったりと床の上に腹這いになり、まるで芋虫のように、弱々しく体をくねらせていた。

薄い布地越しに見える体のラインは恐ろしく細く、顔も腕も脚も

紙のように白い。その白と濡れて乱れた黒髪との対比が、あまりにも生々しくてリアルで…。

最初に女がいたのは、玄関に続く廊下の奥だった。ただでさえ暗い上に、溜め続けたゴミ袋の山に隠れて、その存在に気付けなかったのだ。

驚愕に震えた俺は、悲鳴を上げること出来なかった。後ろを振り返って廊下を確かめたが、そこにはいつも通り、薄暗い空間が広がるばかり。

（見間違い？）

俺はテレビに向き直る。

廊下の隅の暗がり…

……。

……やはり、いる。

俺は繰り返す、テレビと廊下を交互に見直した。テレビの中の俺も、全く同じ動作で狼狽している。

テレビにはリアルタイムで俺の部屋が映っているのに、まるで間違ひ探しのよう、女が存在の有無だけが違う。

俺は頭を掻きむしった。

カメラも無いのに自室を映すテレビ。テレビの中から見詰める不気味な女。理不尽な事態に混乱して震え、俺はよろめいてテレビから後退った。

とにかく外へと、本能的に玄関へと逃げ出した時、俺は靴箱の上の鏡を見てハッと立ち止まった。

後から思えば、そんな状況で足を止めたこと事態、異常な行為ではあったのだが。

玄関にポツンと掛けられた鏡の中に、俺は己の姿を見て愕然としたのだ。

それはみすばらしい、枯れ果てた、ボロ屑のような、強張った青白い男の顔だった。

コレガ、今ノ、俺。

明確に意識した瞬間、言いようのない恐怖心がドツとなだれ込み、冷たい汗が噴き上がって額を流れた。

洗面所にも鏡くらいはあったし、自分の顔を見たのが久々だったというわけではない。

その鏡が、玄関にあった物だったから。

自分が今外に出ようとした瞬間だったからこそ、俺は自分の姿を思わず客観的な視点で見てしまったのだ。

（こんな姿で外に出る？この惨めな様を世間に晒す？）

ありえない。

ありえない、ありえない、ありえない！

俺は玄関から外に出ることも、テレビのあるリビングに戻ることも出来ず、頭を押さえて悲痛な呻き声を漏らした。

どうすることも出来ずに狭い玄関で悶え、へたり込んだ時には低い嗚咽を漏らしていた。

玄関とリビングの間で二つの巨大な恐怖に挟まれ、俺はじわじわと狂っていったのだと思う。

俺はソファで力を抜いたまま、じつとテレビの女を見ている。

女はいつも小刻みに蠢いている。それは寒さに震えているようでもある、痛みに悶えているようでもある……。

血走った、けれど感情の込まらない、死人の目。

ただ震えているだけのように見えた女は、実は少しずつ少しずつ、前進していた。腕の力だけで固まった体を引きずるように、醜い動作でゆっくりと這い進んできていた。

最初玄関近くにいた女は、今や廊下を渡り切り、ようやくリビングの入口にまで到達していた。

（こいつが俺の所にまで着いたら…その後は？）

テレビの中にだけ存在していた女は、その瞬間実体となって俺の首を掴むのだろうか？

俺はその場面を想像しながら、女の濁った目をぼんやりと見詰めた。

見詰めているうちに、想像は過去の回想へとすり変わっていく。それはどれも辛く苦い、精神を切り刻まれるような屈辱の思い出ばかりだ。

ああ、と俺は呻いた。

（お前の目は、あの時の俺の目にそっくりなんだ！）

部署内の他人のミスが、いつの間にか俺のミスに仕立て上げられている。正当な抗議をしているのに鼻で笑われ、自身の失態も認められない愚か者と罵られる。

手柄を立てる機会は根こそぎ奪われ、積み重なっていく大小のミスミスミス。

上層部の人間から、俺に対する信頼が落ちていく。それを痛いほどに感じるのに、部署内の俺に対する仕打ちを証明することが出来ない。

周到に練られ、確実に俺を絡め取る悪意の触手。

遊び感覚で奪われていく今までの地位。勉強を積み、寝る間も惜しみ、コツコツと積み上げてきた苦労の結晶だったというのに。

自分に関係無いトラブルで怒鳴られる毎日を送るうちに、俺はいつしか瞳の輝きを失っていった。

それこそ、このテレビの中の女のように。

パキン。

小さな家鳴りが鼓膜を震わせ、俺はふと我に返った。



テレビに意識を戻す。

画面に映る俺の間近に、女が迫ってきていた。

手を伸ばせば、もう触れられるかもしれない距離だ。

女の青白い顔が真っ直ぐにこちらに向けられている。充血した目が、今にも血を滴らせそうだ。

半開きになった紫色の唇がワナワナと震え、硬直した体を必死にのたつたせて近付いてくる。

俺は喉が引き攣るのを感じた。

怯えて悲鳴を上げそうになったわけではない。

堪らなく、おかしさが込み上げてきたのだ。

だつてずいぶん奇妙な取り合わせじゃないか？

死んでも尚、この世界に未練を残し執着する女と、生きてはいるが、現実には絶望し全てを諦めてしまった男。

体が死んだ者と、心が死んだ者。

（どっちの方が、より不幸で哀れだ？）

思った瞬間、喉から堪え切れない笑いが溢れた。引き攣った喉が喘ぐように震え、俺に甲高い狂人の馬鹿笑いを上げさせる。

（醜い死霊となつても、まだこの世を恋しがつてすがり続ける、哀れな女）

息が止まりそうな爆笑の発作、掠れた激しい笑い。

（命を持っているというだけで、他には何も無い俺。恋しいモノもするモノも何も無い哀れな俺）

爆笑、爆笑、爆笑。

（より哀れなのは、救いが無いのは）

爆笑、……そして、涙。

狂った笑いの発作を止められない俺を、朽ち行く女がじっと見ている。

汚水を滴らせ、青冷めて虫のように蠢いていた女の死人そのものの顔に、初めて感情らしきものが宿った。

女の、濁った目に宿った初めての意思表示の光。

それは、紛れもない、俺に対する恐怖と哀れみの感情だった。

## （後書き）

読んで下さって、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4278b/>

---

MIDNIGHT・TV

2010年10月8日15時45分発行